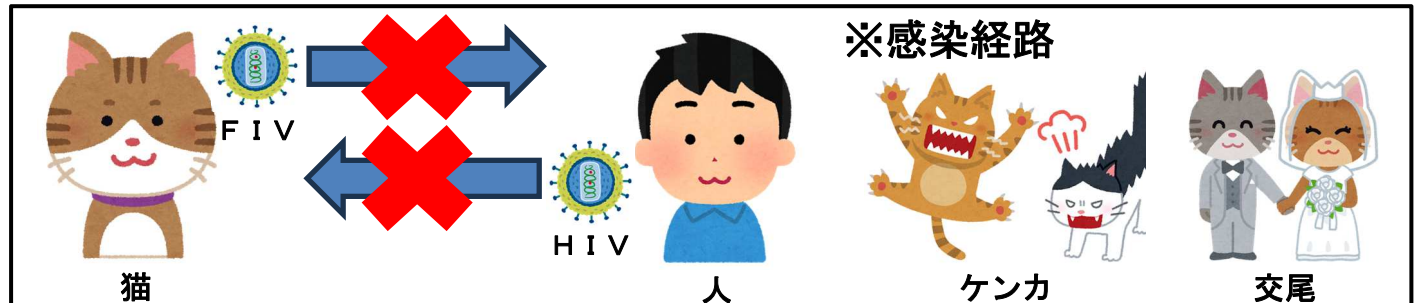


FIV(猫免疫不全ウイルス)について

○「FIV 感染症」とは？

『猫エイズ』とも呼ばれ、ウイルスが感染し発症すると、免疫力が低下して日和見感染症※、食欲低下、下痢などの様々な症状が出ます。同じくエイズと呼ばれる HIV(ヒト免疫不全ウイルス)感染症がありますが、別々のウイルスなので、**FIV が人に感染することはありませんし、HIV が猫に感染することもあります。**主な感染経路は激しいケンカによる咬傷や交尾です。そのため、不妊・去勢手術をしていない野良猫や屋外に出る飼猫は感染リスクが高いです(特に雄猫)。

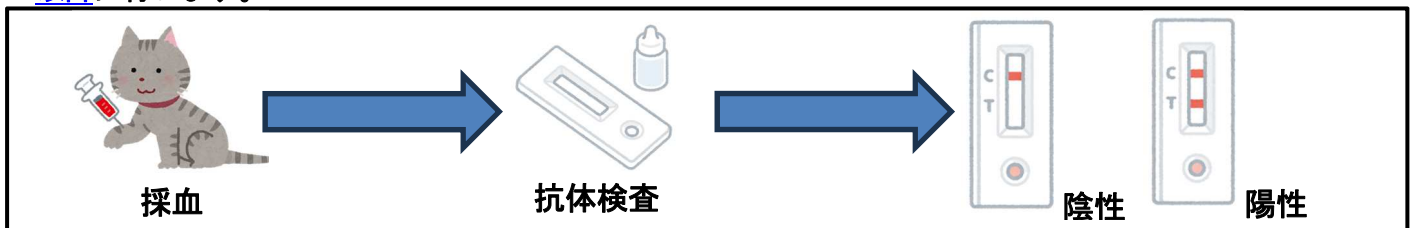
※日和見感染症：体の防御機能が低下することによって様々な感染症にかかりやすくなることを言います。



○検査方法(簡易検査)

猫から採血して数滴の血液を使用し、検査キットにより 10 分程度で結果が出ます。

感染してから検査で陽性反応が出るまで約 1～2 ヶ月かかりますので、感染した直後は検査をしても、陽性反応が出ません。抗体を検査しているので、陽性の場合は①過去または現在ウイルスに感染した、または②母猫から抗体だけもらった(母乳からの移行抗体)のどちらかです(つまり感染していない可能性もあります)。数ヶ月後の再検査で①の場合は陽性のまま、②の場合は陰性になります。②の場合であっても、移行抗体の消失時期は個体により大きく幅(2～6 ヶ月齢)がありますので、子猫の再検査は 4～6 ヶ月齢以降に行います。



○FIV 感染症の症状

【急性期】ウイルスに感染してから、1～数ヶ月にわたる期間であり、一時的にリンパの腫れや発熱などを起こすことがあります。症状の程度には個体差がありますが、この時期を過ぎると無症状キャリア期に移行します。

【無症状キャリア期】ウイルスに感染していても発症しない期間であり、長い時は 10 年を超える場合があります。そのため、ストレスや体調に注意していれば、発症せずに天寿を全うする場合も少なくありません。ただし、感染力のあるウイルスが体内にいるため、他の猫にウイルスを感染させてしまう可能性があります。

【後天性免疫不全症候群期】リンパ節の腫れに加え、口内炎や風邪症状、慢性的な下痢、皮膚病などを発症し、更に進行すると体重減少や食欲低下、貧血、悪性腫瘍の発生、日和見感染などが見られます。最終的には全身の機能低下が顕著になり死に至ります。

○FIV 感染症の治療法

体内からウイルスを完全に排除することは出来ず、完治させるような治療法は確立されていないので、症状を緩和する対症療法になります。

○FIV 感染症の予防法

①完全室内飼い

FIV が陽性である、あるいは陽性の可能性がある猫との接触の機会を無くし、ウイルスに感染する機会を防ぐことが大原則です。また、複数頭飼育する場合には、全頭の検査を行って陰性であることを確認しましょう。もし、陰性の猫と陽性の猫がいる場合には、部屋を分けて飼育しましょう。

②ワクチン接種

FIV に対する単体のワクチンがあります。しかし、感染防御効果が完全では無く(感染リスクをゼロには出来ない)、ワクチン接種による抗体誘導により簡易検査時に感染との区別が出来なくなるというデメリットがあります。ワクチン接種をする場合には接種歴をきちんと記録しておくことが重要です。